

詩集·隨筆·紀行



詩集・隨筆・紀行

井上靖文庫

新潮社

井上靖文庫 26 (第二十六回)

昭和三十八年六月十五日発行
昭和四十一年八月五日二刷

著 者 井 上 靖

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京(26)二一一一 振替東京 銀

定価三五〇円

印刷所 塚田印刷株式会社
製 本 神田加藤製本所

落丁本はお取替え致します

目次

詩集

『北国』

人生 獵銃 海辺 北国 愛情 葡萄島 瞳 生涯

一〇 三 四 六 八 一〇 二〇 二六

記憶 元氏 カマイタチ 不在 漆胡樽 シリア沙漠の少年 渦 流星

二六 三〇 三三 三六 三八 四二 四四 四六

半生	四六	落魄	七三
比良のシャクナゲ	五〇	二月	五五
高原	五三	破倫	五八
輸送船	五五	梅ひらく	六二
野分(一)	五八	裸梢園	六五
野分(二)	六一	十月の詩	六八
石庭	六〇	六月	七〇
友	六三	夏の終り	七二
聖誕祭前夜	六四	その日そんな時刻	七六
さくら散る	六六	ある旅立ち	七八
夜霧	七〇	元旦に	八二

『地中海』

オリーブの林	六	カルモナの街	一三
落日	六	天壇	一六
エトルスカの石棺	一〇	木乃伊	一六
地中海	一〇	ボンベイ	一〇
白夜	一四	ビーディナという部落	一三
インダス河	一八	ガダルキビル河	一六
北極圏の海	二〇	コリントの遺跡	一八
ロスアンゼルス の 遊園地	二三	ある漁村	一四
夏雲	二四	明方	一四
布哇の海	二六	高層ビル	一六
アスナロウ	二八	少年	一八
珠江	三〇		

随筆

万曆帝の墓

一五三

青春放浪

一六二

母を語る

一七五

サンデー毎日記者時代

一八〇

華麗な開会式をみて

一八九

美しい囃の宮

一九五

私の敦煌資料

二〇三

「蒼き狼」の周囲

二〇六

茶々の恋人

二一三

言葉について

二一六

天風浪々

二九

美しい川

三三

紀行

北イタリアの旅から

三九

万里の長城と北京の天壇

三五

雪の下北半島紀行

二六

大佐渡小佐渡

二七

佐多岬紀行

二〇〇

穂高の月

二六

早春の甲斐・信濃

二九

沖縄の一週間

三二

早春の伊豆・駿河

三六

新春紀行

三四三

解説

福田宏年

三四七

年譜

福田宏年

三五七

詩
集

北
国

人生

M博士の「地球の生成」という書物の頁を開きながら、私は子供に解りよく説明してやる。

——物理学者は地熱から算定して地球の歴史は二千万年から四千万年の間だと断定した。しかるに後年、地質学者は海水の塩分から計算して八千七百万年、水成岩の生成の原理よりして三億三千万年の数字を出した。ところが更に輓近の科学は放射能の学説から、地球上の最古の岩石の年齢を十四億年乃至十六億年であると発表している。原子力時代の今日、地

球の年齢の秘密はさらに驚異的数字をもって暴露されるかもしれない。しかるに人間生活の歴史は僅か五千年、日本民族の歴史は三千年に足らず、人生は五十年という。父は生まれて四十年、そしておまえは十三年にみたぬと。

——私は突如語るべき言葉を喪失して口を噤んだ。人生への愛情がかつてない純粹無比の清冽さで襲ってきたからだ。

獵銃

なぜかその中年男は村人の輦轎を買い、彼に集まる不評判は子供の私の耳にさえも入っていた。

ある冬の朝、私は、その人がかたく銃弾の腰帶バンドをしめ、コールテンの上衣の上に獵銃を重くくいこませ、長靴で霜柱を踏みしだきながら、天城への間道の叢をゆっくりと分け登ってゆくのを見たことがあった。それから二十余年、その人はどうに故人になったが、その時のその人の背後姿は今でも私の臉から消えない。生きものの命断つ白い鋼鉄の器具で、あのよう

に冷たく武装しなければならなかったものは何であつたのか。私はいまでも都会の雑沓の中にある時、ふと、あの獵人^{ひと}のように歩きたいと思うことがある。ゆっくりと、静かに、つめたく――。そして、人生の白い河床をのぞき見た中年の孤独なる精神と肉体の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺^{スタンプ}印するものは、やはりあの磨き光れる一箇の獵銃^{ハンター}においてはないかと思うのだ。

海 辺

土地の中学生の一団と、これは避暑に来ているらしい都会の学生の一団とがすれ違った。海辺は大方の涼み客も引揚げ、暗い海面からの波の音が急に高く耳についてくる頃であった。すれ違った、とただそれだけの理由で、彼らは忽ち入り乱れて決闘を開始した。驚くべきこの敵意の繊細さ。浜明りの淡い照明の中でバンドが円を描き、帽子がとび、小石が降った。三つの影が倒れたが、また起き上った。そして星屑のような何かひどく贅沢なものを一面に撒き